社会関係資本論とマイクロ－マクロ連関
―温泉地の観光まちづくりを事例とした経験的検証―

金井雅之（専修大学）
mkanai@isc.senshu-u.ac.jp

第83回日本社会学会大会
「観光（文化・社会意識(4)）」第5報告
2010 年11 月7 日（日），名古屋大学

社会関係資本（Social Capital）の2つのレベル

マイクロSC

- 行為者レベル
- 集団内部や外部の有力な行為者との紐帯 (Granovetter 1973, Lin 2001)

収益を期待した合理的な投資

マクロSC

- 集合体レベル
- 集合体の効率を上げる信頼，互酬性の規範，ネットワーク (Putnam 1993)

合理的行為に対する機会と制約の構造

リサーチ・クエスチョン

マクロSC

行為者は
機会構造を利用して
収益のために投資する

行為者の
合理的投資が
蓄積する

マイクロSC

どちらのメカニズムが経験的データから検出できるか？

事例：温泉地の観光まちづくり

- 温泉地全体の活性化には当事者（e.g. 旅館）たちの協調関係（＝マクロSC）が不可欠.
- 活性化はすべての旅館の利益になる.
- しかし協調にはコストがかかるので，合理的な旅館はフリーライドする誘因をもつ（＝社会的ジレンマ）.

観光まちづくりにおける協調はなぜ生じうるか？

競争 vs. 協調

- 温泉地のマクロSC（＝協調）が乏しいとき
  → 旅館同士の競争が激しい
  → 個々の旅館は温泉地内の旅館との関係よりも外部との関係（＝外部志向的SC）に投資した方が有利.（cf. Burt 2001, 2005）
- 温泉地のマクロSCが豊かなとき
  → 旅館同士の競争は穏やか
  → 温泉地内の旅館との関係への投資（＝内部志向的SC）が利益をもたらす.

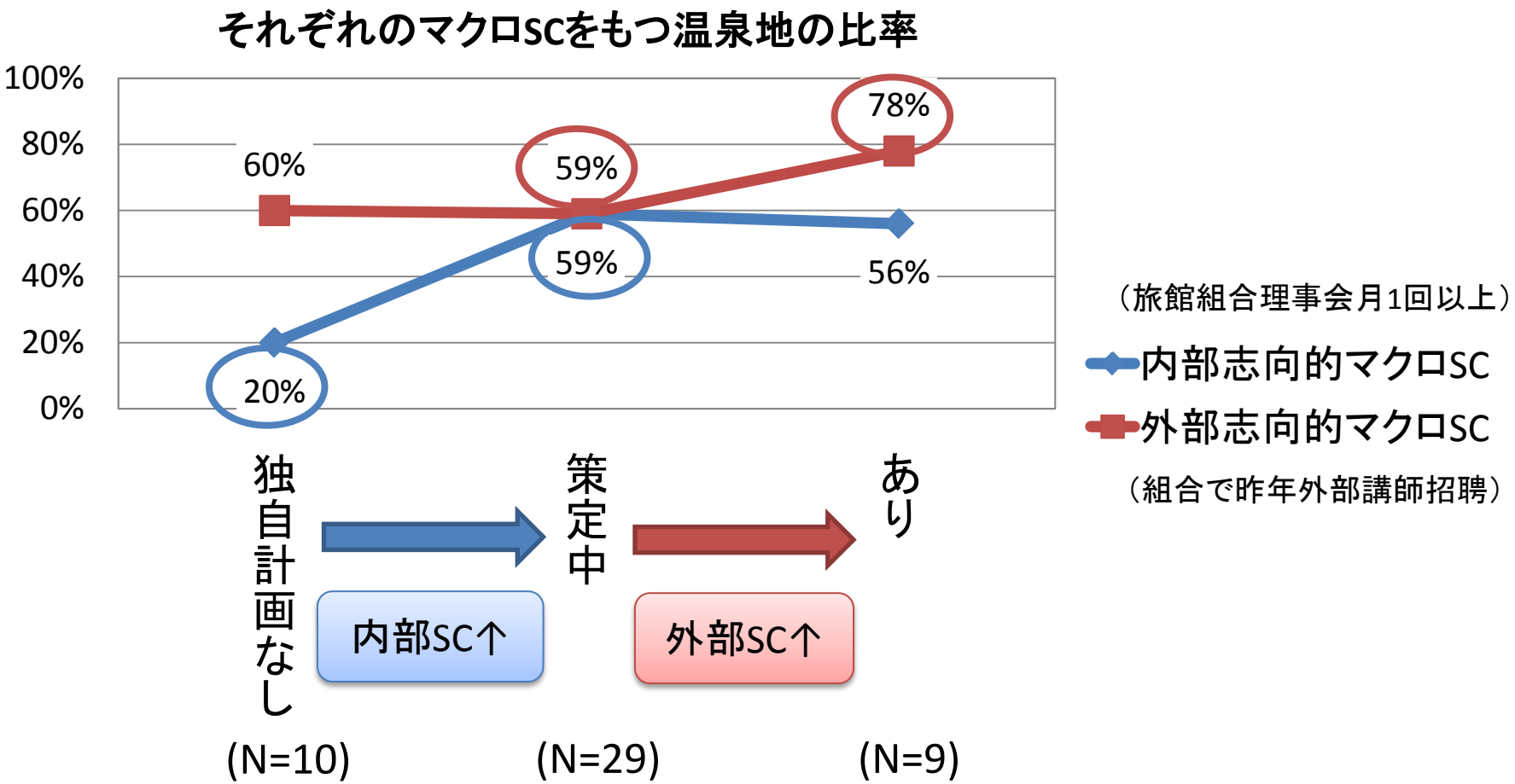
合理的行為に対する機会と制約の構造としてのマクロSC

データ

温泉地域の現状と取組みについての学術調査

対象	長野・山形・群馬・新潟県で，旅館組合への加盟旅館数が10軒以上あるすべての温泉地の，旅館組合に加盟するすべての旅館（ホテル等も含む）
標本サイズ	1,515軒（56温泉地）
方法	送付・回収ともに郵送による質問紙調査
実施時期	2007年1月23日～2月20日
回収数	779軒（51.4%）

温泉地の観光まちづくりの発展段階（金井2008）



内部志向的マクロSCに注目

	第1段階	第2段階
まちづくりの独自計画	なし	策定中
温泉地数	10	29
旅館同士の協調	なし	あり
温泉地内の 内部志向的マクロSC	乏しい	豊か

予想A：マクロ→マイクロ

	第1段階	第2段階
内部志向的マクロSC	存在しない	存在する
旅館同士の関係	競争	協調

投資するマイクロSC	第1段階	第2段階
内部志向的	収益(*)悪化	収益向上
外部志向的	収益向上	収益悪化

(*) 個々の旅館の客数と売上の5年前との比較

予想B：マイクロ→マクロ

第1段階

内部志向的
マイクロSCへの
合理的な投資

→ 蓄積

第2段階

温泉地における
内部志向的
マクロSC

投資するマイクロSC	第1段階	第2段階
内部志向的	合理的	＝収益向上
外部志向的	合理的でない	＝収益悪化

仮説

A　マクロ→マイクロ

投資するマイクロSC	第1段階	第2段階
内部志向的	収益悪化	収益改善
外部志向的	収益改善	？

B　マイクロ→マクロ

両立不可能！

投資するマイクロSC	第1段階	第2段階
内部志向的	収益改善	？
外部志向的	収益悪化	？

使用する変数と記述統計

	第1段階			第2段階	
	平均	SD		平均	SD
独立変数					
内部志向的SC (1-5)	2.87	[1.04]	< *	3.15	[1.09]
外部志向的SC (0, 1)	0.19	[0.39]	>	0.13	[0.33]
統制変数					
料金 (1-5)	1.66	[0.86]	< †	1.81	[0.82]
経営努力 (0-8)	2.86	[1.45]	< †	3.15	[1.49]
従属変数					
経営改善 (2-14)	5.86	[2.43]	<	6.11	[2.24]
N	118			386	

* $p < .05$, † $p < .10$

変数の詳細は配付資料参照

回帰分析の結果

	第1段階		第2段階	
内部志向的SC	.20		.30	†
外部志向的SC	1.28	*	−.04	
料金	.45		.76	***
経営努力	.31	†	.16	*
N	118		386	
adj. R^2	.194	***	.142	***

従属変数は「経営改善」. 非標準化係数.
† $p < .10$, * $p < .05$, *** $p < .001$

どちらの仮説が正しいか？

	A：マクロ→マイクロ		B：マイクロ→マクロ	
	第1段階	**第2段階**	**第1段階**	**第2段階**
内部志向的SC	−	＋	＋	？
外部志向的SC	＋	？	−	？

結果

	第1段階	**第2段階**
内部志向的SC	n.s.	＋
外部志向的SC	＋	n.s.

仮説A（マクロ→マイクロ）が支持された！

結論と考察

- 仮説A（行為者は既存のマクロ水準の機会構造＝マクロSCを活用している）は支持された.
- 仮説B（マイクロSCへの合理的な投資の蓄積がマクロSCを生成する）は支持されなかった.
- 観光まちづくりにおいてマクロSCは重要だが，なぜそれが生成されたかは，マイクロSCへの合理的な投資という観点からは説明できない.
- 今後の課題：では他のどのようなメカニズムによってマクロSCが生成されたのか？